

仏教と現代社会のインターフェイス

浄土真宗本願寺派僧侶、布教使
松本圭介さん

仏教には豊富なコンテンツがあるが、お寺や僧侶はその魅力にあまり気づいていない。そのコンテンツを活用すれば、仏教はエンターテインメントを提供できるに違いない。——そんな構想を抱く東大文学部哲学科卒の若い僧侶がいる。彼は「凝り固まった仏教をときほぐしたい」と語り、インターネットやイベントを通じて現代に息づく仏教へと再編集すべく活動を続けている。「仏教と現代社会のインターフェイス」を目指す松本圭介さんだ。



彼岸寺
<http://www.higan.net/>



梅上山 光明寺
<http://www.komyoji.org/>

浄土真宗のお寺の本堂は、昔から「仏教の教えを学ぶ道場（聞法の道場）」と言われてきた。松本さん愛用のMacを持参してもらい、光明寺の本堂にて撮影。



松本圭介さん

1979年、北海道生まれ。法名・釈紹圭（しゃくしょうけい）。浄土真宗本願寺派僧侶、布教使。東京・光明寺（港区虎ノ門）所属。東京大学文学部哲学科卒業後、仏教界の扉を叩く。僧侶として光明寺に住み込み活動する傍ら、2003年に超宗派の僧侶たちが集うウェブサイト「彼岸寺」(ヒガンジ)を設立。その後、お寺を会場とした音楽イベント「誰そ彼」(たそがれ)や、寺院内カフェ「ツナガルオテラ神谷町オープンテラス」を運営。2005年夏には築地本願寺にてライブイベント「他力本願でいこう！」を成功させる。著書に「おぼうさん、はじめました。」がある。



おぼうさん、はじめました。
ダイヤモンド社
1600円＋税

東大新卒の松本圭介さんが、飛び込みで就職したのは都心のお寺だった。研修レポートや個性的な人との出会い、「寺院内カフェ」「築地本願寺にて2000人動員フリーライブ」などの活動を綴ったブログの書籍化。

インターネット上のお寺

ひとりの若い僧侶が、多くの人に仏教に興味を抱いてもらうために、独自のアプローチを試みている。

彼が目的のために選んだツールのひとつが、インターネットだった。

僧侶になるまで、そして僧侶になってからの生活と意見を、東京都港区の光明寺の僧侶である松本圭介さんはブログで公開してきた。

「ブログサイトは、より多くの人に仏教にふれてもらいたいと考えて始めたものです。ウェブサイトの『彼岸寺』は、直感的なインターフェイス作りを試み、情報を探すストレスを少なくし、すぐに中身に入っていけるようにしようと考えています」

松本さんは、サイトを作ることを心からおもしろがっている。

「デジタル媒体でも、作り手がおもしろがってやっているかいないかということは、見ている人にも伝わりますよね。ブログはとても使いやすいメディアですが、ともすると画一的になってしまいます。ですから、いかに人肌感を出せるようにカスタマイズできるか、ということに結構こだわっています。

テンプレートをひとつひとつ作り込んでいったりすることと同時に、大切なのはコンテンツそのものの編集作業をしっかり盛り込んでいくということ。その編集作業がにじみ出て、はじめて人肌感につながるのだと思います」

今春リニューアルするにあたり、練り直した「彼岸寺」のコンセプトはこうだ。

「彼岸寺は、インターネット上に建てられたみんなのお寺です。凝り固まった仏教をとき

ほぐし、今に生きる仏教へと再編集する、まったく新しいメディアです。彼岸寺を通じて世界中の皆さんに素敵なお縁を結んでいたけると嬉しいです」

ブログ、コンテンツ、テンプレート、編集、メディア…。一般的な僧侶が自在に操ることの少ないジャンルの言葉が続く。

「物語消費という文脈でいえば、仏教という豊富なコンテンツは物語にあふれており、その物語は大きな商品です。映像化して物語を提供することもできるし、仏教的な考え方を形にしたプロダクトを生み出していくこともできます。そういうところで仏教を活躍させたいんです。『彼岸寺』をリニューアルしたら講座を開いて、ビデオポッドキャストもやる予定です」

仏教のおもしろさは尽きない

松本さんはよく「どうしてお坊さんになったのか？」と聞かれるという。

「その質問を受けたとき、いつもいろんな答え方をしてしまいますが、自分の中では、お坊さんになった理由を説明する必要はなく、強いていえば、やりたかったから。でも、じゃあやりたくなくなったらお坊さんを辞めるのかといえば、それはあり得ないことだと思っています。というのは、仏教のおもしろさが尽きることはないだろうと感じているからです。けっこう飽きっぽい自分ですが、仏教の深さに飽きることはないでしょう」

僧侶になった動機に、意外な「軽さ」が感じられる。

「でも、軽さというのは、結構大事です。サイト『彼岸寺』もできるだけ多くの、

2005年夏に開き、大成功を収めた築地本願寺でのライブイベント「他力本願でいこう！」。





光明寺で開催される音楽イベント「誰そ彼」(たそがれ)。

光明寺の本堂を利用して開かれる寺院内カフェ「神谷町オープンテラス」では、ドリンクとお菓子がオーダーできる。

いろんなタイプの人に見てもらいたいと思って、切り口をいろいろ設定しています。間口を広く取っているの、浅く読んでくれる人はそれでいいんです。でも、一見とっつきやすいものでも、詳細に見れば、バックグラウンドもしっかりしているし、作り込みもできている、というふうに、本格志向の方にも楽しく読めるように作っていきたいと思っています」

現代人に届けるのだから、ある程度の“俗っぽさ”も必要だろう。

「アンテナは常に張っています。好奇心旺盛で、いろんなことに関心を持ち、いろんな人に会い、よく飲みに行き、話します。それは同時代的なフィルターを通して仏教を見る、ということにもつながるでしょうか。そういう作業そのものが仕事であり、趣味でもあるんです」

書物もさることながら、人を介して仏教にふれる機会が多いとすれば、僧侶の人間性はとても重要だ。

「仏教は、お釈迦さまが悟られたことを説いてまわったもの。お釈迦さまの一生は仏道の模範であるわけです。仏教は学ぶもの

ではありませんが、身につけていくもの、歩んでいくものだ、と言い換えたときに、大事になってくるのは人です。『あの人が言っているんだから自分もやってみよう』という動機も大事なものでしょう」

『彼岸寺』を引用して、布教のあり方にもふれる。

「何が布教なのかと考えたときに、もしかしたら『彼岸寺』もそこに集まる人たちがおもしろがってやっており、その様子を感じ、その姿から何かしら影響を受けるということかもしれません。『よし自分も仏教を勉強してみよう』なんて、そんなに気張らなくてもいいんです。『こんなにおもしろがってやっている人たちが集まっているんだから、ここにはきっと何かがあるんだろう』と思っもらうことが大事なんです」

仏教は元来オープンソース

松本さんは、いま仏教周辺を漂うことに意味を見出している。

「お坊さんになって、まだ4年。早く仏教の真髄を悟ればいいんですが、そうは簡単にいくもんじゃない。“仏教コンテンツ”と語っているものの、どこまでつかめているのかと言えば、まだぜんぜんです。

でも、方向性に自信はあるんです。つかんでいるという自信ではなく、仏教周辺を漂っていることが絶対意味のあることだ、という自信が。歴史的にいえば、仏教はとても多くの人が関わって、惹きつけられて、できていったものです。日本に入ってきてからも諸宗派が生まれ、それぞれにおもしろさがあります」

そして仏教の引力を語る。
「これまで多くの高僧・名僧たちが存在しましたが、書物を通じて彼らと再会することもできるわけです。多くの人たちが命がけで受け継ぎ、守り、さらに発展させてきた仏教に携わることが喜びでもあります。自分も

そこに集まっている人たちに惹きつけられて周辺を漂っている一人である、と感じています。人が人に引き寄せられていくというのが、仏教を形づくってきた要素だと思います」

さらに仏教を独自の表現でたとえていく。「自分たちは『仏教2.0』と呼んでいます。元来仏教はオープンソースでつくられています。パチカンみたいな固定的なオーソリティーがあるわけではなく、ばらばらになって、それぞれが独自の発展の仕方をしてきました。それも仏教の特徴のひとつで、いろんな人が独自の解釈をし、さまざまな流れをつくってきました。それら全体をひっくるめて『仏教』と呼んでしまう、そのおおらかさというのもすごいですし、先進性も高いのではないのでしょうか」

松本さんは「仏教2.0」について、ブログで次のように綴っている。

「今ウェブで起きている知的創造の仕組みの大変化って、まさに仏教がこれまでにやってきたことなのではないかと思うのです。そして、仏教はウェブの遙か先に到達してしまっている、とも。どちらも目指していることは、『あちら側にある知にアクセスすること』。ウェブは様々な情報に、仏教は仏の智慧に。ブラウザやその他のアプリケーションと座禅や祈禱といった仏教の様々な方法を媒介に、あちら側にあるものを目指すわけです」

仏教とウェブの間に共通点を見いだした松本さんは、現在の自分の役割を次のように表現する。

「僕の仕事は、仏教と現代社会のインターフェイスになること」



Text by : 倉田 楽